

▶ 知っています？市の森林皆伐で市民の財産が失っていること。

白旗山都市環境林ニュース

2024年12月16日(月) NO.9 発行:札幌の自然を守る会 代表 梶田清尚 HP:<https://midori.kei1.org>

秋元市長自ら基本計画破る なぜ破壊する市民の森・白旗山都市環境林



「主伐」「皆伐」「択伐」の違い

札幌市は市唯一のまとまった森林である白旗山都市環境林をまもり育てるのではなく、皆伐という名で大規模に森林を切り倒していることがわかりました。林業で木を切り倒す動作を「伐採」といいますが、伐採は作業工程と目的により呼び方が変わります。

「主伐」「皆伐」「択伐」となりますが、その違いによって、後で説明するように「主伐」のうち「皆伐」と「択伐」がありますが、その違いによって、森林の姿が大きく変わります。いま白旗山は「皆伐」という破壊の道を札幌市自ら進めています。

この破壊をいま止めさせなければ、二度と白旗山都市環境林のきれいなたすまいを目にすることはないでしょう。

まず、「主伐」について説明します。主伐とは手塩にかけて育てた木を木材にするために切るための伐採を指します。農作物でいうところの収穫を意味し、木材は林業の収入源そのものになります。主伐の時期はその時代の需要などによって変化がありますが

白旗山基本計画・施業方針違反

規定→「皆伐による裸地を生じせしめない」

札幌市が1984年10月に定めた「白旗山都市環境林基本計画」では、当該林の基本方針を明示しており、これらは市民にもオープンにしています。40年を経過した現在においても変っていません。

基本方針では、当該林の歴史を継承し発展させる立場から森林経営の目標を都市環境林の形成における、森林の整備においては総合的な森林資源の培養をはかり、多角的な公益機能を高めることにつとめ、森林レクリエーションにおいては林業体験の普及、自然教育の推進及び森林との多様なふれあいをふかめることのできる「市民の憩の森」として開放する。

施業方法では、択伐施業とし林地内に皆伐による裸地を生じせしめないよう恒続的な森林の更新をはかる。

自然資源の復元・増殖では、森林の自然資源を総合的に高め、植物、鳥類、昆虫類などによる自然教育の推進。鳥獣保護区として、キタキツネ、タヌキ、エゾリス、エゾモモンガ、野鳥等の保護をはかる。さらに蝶類、トンボ類等、ホタル、エゾサンショウウオ等、カタクリ、エゾエンゴサク、スズラン等の野草類の復元・増殖をはかる。(以上、基本計画の要旨を一部抜粋)

札幌市が自ら立てた基本計画を一方的に破る行為は、市民の貴重な森林という財産を破壊するものであって、まさに人・動植物にたいする行政暴力そのものです。そんな権力は札幌市に与えてよいのでしょうか。

50年～100年前後の木が主伐対象となるようです。

白旗山の森林皆伐をしない方針を 秋元市長が自ら破る

そこで白旗山において特に問題なのは、札幌市の秋元市長が進めている「皆伐」という方法です。皆伐も主伐の一種で木材のために木を収穫するための伐採ですが、一定区間の木を全てバッサリ切ってしまう事を指します。この方法は当該林基本計画では禁じています。しかし白旗山の一定スペースの森林がすっぽりなくなっています。皆伐によってまとめて伐採されたところを植林すると、同じ樹齢の木をまとめて育てる事ができ、育った木はまた同じように半世紀先に皆伐で一斉に収穫ができます。それが問題です。その間の大半は従来の林ではなく、また皆伐によって生き物のほとんどが全滅です。

また白旗山環境林は市民の散策場でもあり、貴重

な自然環境の森でもあります。その森をなによりにするのが皆伐ですので、その分大量に木材が収穫できる半面、山肌が丸裸となるため生態系の壊滅や、土壤にダメージを与えることになり、結果的に森林破壊を札幌市自ら行っているのです。

次に「択伐」ですが、これは人工林内の樹木を数年から数十年の長いスパンをかけて、その時需要のある用材に向いた木を抜き切りして、その後に後継の木を植林し、人工林を更新していくスタイルの伐採を指します。

こうする事により林業経営を持続的に行う事ができ、安定した品質の木を長期にわたり収穫する事が可能になります。

この方法は森林の維持管理からよい方法ですが、択伐した木を森から搬出する際にまだ切られていな木にキズをつけないように木を運ぶための路網の整備などの課題が想定されます。

シリーズ5 最終回

生物多様性 豊かな森林

「白旗山都市環境林」にある高齢なカラマツ林は、ミズナラ、ハルニレ、イタヤカエデ、シナノキ、ホオノキ、ハリギリなど有用な広葉樹が生育し、理想的な混交林を形成しています。それは、適時に間伐を実行してきたからです。また、そこでは孔状地化した場所にエゾマツなどの針葉樹を植え込み、育成管理することによって、この土地にあった潜在植生が復元され、生物多様性豊かな森林が蘇りつつあるのです。

このようにカラマツ林分においては、皆伐による森林劣化を避け、天然の力を借りる補助作業を指向し、天然木の育成に努めるとともに、樹下植を励行すべきです。造林木は択伐により収穫されればそれに越したことはないでしょうが、残存木であっても将来、銘木として残るものもあれば、朽ち果てるものもあります。しかし、人工

林から天然生林への緩慢な移行を目指す森づくりとは、こうした倦まず弛まぬ努力が必要なのです。

炭素は、森林にこそ閉じ込めておくべきもの

結びに…

森林を論じる場合、時間概念が大きなファクターになっているのは、今更持ち出すことさえ憚れる周知の事柄といえます。しかし、驚くべきことに、これがしばしば専門家と言われる人たちから抜け落ちることがあるのです。

よく“皆伐した木は化石エネルギーからのCO₂の排出を抑え、木材から発生するCO₂は将来、植えた木が回収してくれる”といった物語が語られますが、高いリサイクル率を誇る木材といえども、カラマツなどはカスケード利用の上流域のものは僅かであり、巷間で語られるほど寿命は長くはありません。林木の成長に比べれば極めて短命です。

この言い種は、かつての「拡大造林」や「森林経理学論争」を思

い起こさせます。これらの末路を見れば、この物語が「捕らぬ狸の皮算用」ではないかと疑いをかけられてもおかしくはない。

また、古くからの「森林純収益説」と「土地純収益説」の論争も、結局のところ、「土地純収益説」が森林を単なる土地に解消してしまう「森林」否定の理論になっているようで、それは近年の歴史が証明しています。これは裸地から始まるCO₂の収支の考え方反映されており、新自由主義的経済理論にも通じる思想なのです。CO₂の収支問題は、既存の「森林」から始めるべきです。

白旗山のケースとは違う森林生態系の炭素貯蔵量をできるだけ高いレベルに保ちながら木材を生産していく場所では、それにふさわしい森林の管理・施業法を求めていくことが大事なことは言うまでもありません。だがいずれの場合であれ、炭素は、森林にこそ閉じ込めておくべきものであり、温室効果ガスによる気象変動の最も有効な安全保障といえます。

シリーズおわり